

Das Veilchen

作曲：W. A. モーツァルト／詩：J. W. v. ゲーテ

Ein Veilchen auf der Wiese stand,
gebückt in sich und unbekannt:
es war ein herzigs Veilchen.
Da kam ein’ junge Schäferin
mit leichtem Schritt und munterm Sinn daher,
daher, die Wiese her, und sang.

Ach! denkt das Veilchen,
wär’ ich nur die schönste Blume der Natur,
ach, nur ein kleines Weilchen,
bis mich das Liebchen abgepflückt
und an dem Busen mattgedrückt,
ach nur, ach nur ein Viertelstündchen lang.

Ach, aber ach!
Das Mädchen kam
und nicht in acht das Veilchen nahm,
ertrat das arme Veilchen.
Es sank und starb
und freut’ sich noch:
und sterb ich denn, so sterb ich doch durch sie,
durch sie, zu ihren Füßen doch.
Das arme Veilchen!
Es war ein herzigs Veilchen.

原語：ドイツ語

すみれ

訳詞：猪村雅子

すみれが一輪、野原に咲いていた、
少し首を傾げ、誰にも知られることなく。
それはかわいいすみれだった。
そこへ羊飼いの娘がやってきた、
足取りも軽く、澁^{はつらつ}刺と、こちらへ、
野原をこちらへやってきて、そして歌った。

ああ！　すみれは思う、
僕がもし、世界で一番美しい花であったなら、
ああ、ほんの少しの間だけ、
彼女に摘み取られ、
その胸に押し当ててもらうまで、
ああ、ほんの 15 分足らずの間だけでも。

ああ、しかし、ああ！
娘はやってきた、
そして、すみれには気づきもせず、
踏んで行ったのだ、そのかわいそうなすみれを。
すみれは倒れて、死んだ、
それでもすみれはうれしかった。
僕は死ぬ、僕は死ぬのだ、彼女ゆえに、
彼女の足に踏まれ、その足もとで。
かわいそうなすみれ！
それはかわいいすみれだった。

ゲーテの詩にモーツァルトが付曲した唯一の歌曲で、通作形式で作られている。通作形式では一番二番といった旋律の反復はなく、詩の進行に従って旋律が変化しながら進む。詩の最後の2行はモーツァルトによって加えられたもので、それによってモーツァルトの考えるドラマが完結する。作曲とは作曲家による詩の解釈の提示であり、そのために私たちは詩をより深く理解することができる。

In der Fremde / Intermezzo

作曲：R. シューマン／詩：J. v. アイヒENDORF

In der Fremde
Aus der Heimat hinter den Blitzen rot,
da kommen die Wolken her,
aber Vater und Mutter sind lange tot,
es kennt mich dort keiner mehr.

Wie bald, ach wie bald kommt die stille Zeit,
da ruhe ich auch, da ruhe ich auch,
und über mir rauscht die schöne Waldeinsamkeit,
die schöne Waldeinsamkeit,
und keiner kennt mich mehr hier,
und keiner kennt mich mehr hier.

Intermezzo
Dein Bildnis wunderselig
hab’ ich im Herzensgrund,
das sieht so frisch und fröhlich
mich an zu jeder Stund’!

Mein Herz still in sich singet
ein altes, schönes Lied,
das in die Luft sich schwinget
und zu dir eilig zieht.

Dein Bildnis wunderselig
hab’ ich im Herzensgrund,
das sieht so frisch und fröhlich
mich an zu jeder, jeder Stund’.

原語：ドイツ語

1840年の作品で、シューマンがアイヒENDORFの詩に付曲した歌曲集『リーダークライス 作品39』全12曲の冒頭の2曲。「異郷にて」では、主人公は、森からはるか故郷を眺め、やがて訪れる静寂の時をひとり静かに待っている。続く「間奏曲」では、森の孤独の中に訪れる懐かしい面影と、ひとときの心の安らぎを歌っている。ピアノと歌が不可分に重なり合って、繊細な内的世界を構築している。

異郷にて／間奏曲

訳詞：猪村雅子

異郷にて
赤い稲妻の向こうの故郷から、
雲がこちらへ流れてくる、
しかし父も母もこの世を去って久しく、
そこで私を知る人はもういない。

すぐに、もうすぐに静かな時が訪れる、
そこで私も憩う、私もまた憩うのだ、
そして私の頭上では美しい森の孤独がざわめく、
美しい森の静寂が、
そして、ここでも私を知る人はいない、
もう誰もいない。

間奏曲
あなたの面影をこの上なく幸せな気持ちで
私は胸の奥に抱いている、
それは生き生きと楽し気に
いつも私を見ている！

私の心は静かに歌う、
古い美しい歌を、
それは空気を震わせて
あなたのもとへ急ぐ。

あなたの面影をこの上なく幸せな気持ちで
私は胸の奥に抱いている、
それは生き生きと楽し気に私を見ている、
いつも、どのひとつひとつの瞬間も。